



世界文学全集 27

ハーディ
テ ス

石川欣一 訳

河出書房新社

世界文学全集 27 ハーディ



© 1963

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和 37 年 1 月 25 日 初版発行
昭和 38 年 7 月 15 日 7 版発行

定価 320円

訳 者 石 川 欣 一
発 行 者 河 出 孝 雄
印 刷 者 堀 鉄 判
装 幀 原 弘

印 刷・株 式 会 社 文 弘 社
製 本・横 田 製 本 株 式 会 社
本文用紙・日本加工製紙株式会社
同 納 入・株式会社大和屋洋紙店
クロス・日本クロス工業株式会社
同 納 入・株式会社小島洋紙店

発 行 所 東京都千代田区株式 河出書房新社
神田小川町三の八 会社

電話東京 (291) 3721~7
掘 替 口 座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

テ ス

第一部

おとめ 五

第二部

おとめの日は過ぎて 七

第三部

再起 一〇〇

第四部

結果 一五二

お祈り 一六〇

第五部

女はつぐなう 二二七

第六部

改心者……………三〇五

第七部

成就……………三六九

年譜……………四〇三

解説……………（大沢 衛）四二五

テ
ス

— 純潔な女 —

忠実に物語る者

トマス・ハーディ

“……哀れに傷つける名よ、わが胸は
寝床として汝を宿らしめん”

W・シェークスピア

主要人物

テス（愛称テッシー） 本編の女主人公。サウス・ウェセックスの片田舎で育った純情無垢な乙女。その美貌があだとなり、苦難の人生を送り、ついに殺人の罪をおかす。

アレック（アレキサンダー） にせのダーバヴァイル家の一人息子。テスの処女性を奪う放蕩無頼の青年。最後にテスのために殺される。

エンジェル・クレア 厳格な牧師の家に育った情熱的な青年。テスと結婚する。近代思想の影響をうけ、聖職につくことをきらって、農場生活にはいる。

ジョン（ダービーフィールド） テスの父親。行商で一家を支えているが、酒飲みの怠け者。

ジョーン テスの母親。子だくさんになやむ無教育な女。

ライザール テスの妹。テスに似て美しい娘。

クレア師 牧師、エンジェルの父。

マリアン、レTTY、イZZ・ヒュエット タルボセイズ酪農場以来のテスの友達。いずれもエンジェルを恋していた娘たち。

グロービー フリントコム・アッシュ農場の主人。

第一部

おとめ

一

五月下旬のある夕方、中年配の男がシャストンから、隣りあったブレイクモア——ブラックムーアとも呼ばれる——の谷にあるマールロット村へと、家路をたどっていた。男の両脚はぐらぐらして、歩き方には癖があり、とかく直線から左へそれるのだった。とくになにを考えていたのでもないが、なにかの意見を確認するかのようになり、ときどき強くうなずいた。からの鶏卵かごを片腕にぶら下げており、帽子は、けばがしわくちゃになって、ぬぐとき親指のつかむところがまったくすり切れていた。まもなく向こうから、かなり年とった牧師が、灰色の牝馬にまたがり、とりとめのない曲をうなりながらやって来るのに出くわした。

「今晚は」と、かごを持っている男がいった。

「今晚は、サー・ジョン」と、牧師がいった。

歩いている男は一、二歩行ってから立ち止まり、ふりかえった。

「ねえ、だんな、失礼ですがこの前の市の日、ちょうどいま時刻この道で出くわしておれが「お休み」というと、だんなは今みたいに、「お休みサー・ジョン」と返事をなさった」

「そのとおり」と牧師がいった。

「それから、その前にもう一度——ひと月近く前に」

「いったかもしれない」

「するてつと、おれがつまらない行商人の、ただのジャック・ダービーフィールドなのに、あの時もこの時も、「サー・ジョン」と呼びなされるのは、いったいどういうわけなのでしょう」

牧師は馬を一步二歩近づけた。

「ほんの気まぐれさ」と、牧師はいったが、ちよつとためらってからまた、「じつは、新しいこの郡の歴史を書くために系図類を調べあげていて、ちよつと前、ある発見をしたものでね。わたしはスタッグフット・レインに住む考古学者のトリンガム牧師なのだ。ダービーフィールド、きみは自分が、古い騎士の家柄ダーバヴィル家の、直系の子孫だということを、ほんとうに知らない

のか。バトル寺院の古文書によれば、この一家は、征服王ウィリアムに従ってノルマンディから渡来したあの有名な騎士、サー・ペイガン・ダーバヴァイルに源を発しているのだ」

「聞いたこともねえよ、だんな！」

「いや、ほんとうなんだ。ちよっと顎を上げてくれないか、横顔をもっとよく見たいから。うん、いささか品位が落ちてはいるが、まさしくダーバヴァイルの鼻と顎だ。きみの先祖は、エストレマヴィラ卿がノルマンディでグラモーガンシャを征服したのを助けた、十二名の騎士のひとりなのだ。君の家族の分家は、英国のこの地方にいたる所に、莊園じやうえんをもっていた。その家々の名は、ステイヴァン王時代の国庫年譜に、のっている。ジョン王の治世の時、分家のひとりは莊園を、十字軍救護騎士団に寄付したくらい裕福だったし、エドワード二世のころ、きみの先祖ブライアンは、大評定につらなるためウエストミンスターに招かれた。きみの一家はオリヴァ・クロムウェルの時代、すこしおとろえたが、たいしたことはなく、チャールズ二世の代になると、忠義のゆえをもって柏かしわの木の騎士（この王、一六五一年ウスターの戦いに敗れ、柏の木陰にかくれて助かった）に任命された。そう、きみの一家には何代ものサー・ジョンがいたわけで、もし騎士ナイトの称号が男爵の称号とおなじように

世襲だったら——事実むかしは父が騎士なら子も騎士になったものだが——きみはいまサー・ジョンということになる」

「とんでもない！」

「要するに」と、牧師は鞭で自分の脚をいきおいよくたたきながら結論した——「英国じゅうにこんなふうな家族は、ほとんどいない」

「なんとまあ、いないのかよ」とダービィフィールドはいった。「それなのにおれは、この教区でもいちばんつまらない男みたいに、くる年もくる年も、あちらこちらろつきまわっていたではないか……トリンガム先生、いったいおれについてのこの話は、どのくらい前からわかっていたのです？」

牧師は自分の知るかぎり、この事実はまったく忘れられており、全然知られていないといってもいい、と説明した。彼自身の調査は、その前の年の春のある日、ダーバヴィル家の栄枯盛衰をたどっているころ、荷車に書いてあるダービィフィールドの名に気がついた日に始まったのだが、それから、ダービィフィールドの父親と祖父について調べあげた結果、もう疑問の余地がないところまで来たのだった。

「最初わたしは、こんな役にも立たない知らせで、きみ

の心をまどわせまいと決心した」と牧師はいった。「しかし時として人間の衝動は、理性の判断よりも強い。それにまた、わたしはきみがこのことについていくらかは、ずっと前から知っているのではないか、とも思つた」

「そういえば一度か二度、おれの家族はブラックムーアに来る前のほうが、景気がよかったと聞いたことはほんとうだ。だが、現在は馬が一頭しかないのに、昔は二頭飼っていたくらいのことだろうと思つて、いっこう氣にかけなかったです。うちには古い銀のさじが一本と、彫りものの印形がひとつありますが、さじ一本と印形一つが、いったいなんだろう……ところがこのおれと、あの高貴なダーバヴィル家の人々が、昔からの同族だったとはねえ。ひいじいさんには秘密があつて、どこから来たのか話したがらなかったということだが……先生、こんなことをうかがつてなんです、現在わたしどもはどこで煙を立てているのですか。つまり、わがダーバヴィル一門は、どこに住んでいるのです？」

「どこにも住んでいない。郡の一門としては、死に絶えたのだ」

「それはまずい」

「いや、嘘でかたまつた家族年代記では、男系の絶滅と

書かれているんだが、じつは、下落し、零落した、ということなのだ」

「するとわれわれの一族は、どこに埋まつてゐるのです？」

「キングズベリ・サブ・グリーンヒルに。パーベック大理石の天蓋の下に何列も何列も、肖像といっしょにおさまつてゐる」

「一門の莊園と遺産は？」

「何もない」

「え？ 土地もないんですか」

「きみの家族には分家が多かったので、前にもいったとおり、ふんだんにあつたが、今はない。この郡には、キングズベリと、シャートンと、ミルポンドと、ラルステッドと、ウェルブリッジに、ダーバヴィルの所有地があつたのだが」

「もう一度わがものにすることは？」

「ああ——それはなんともいえない」

「おれとしては、どうしたらいいのだろう？」ダービィフィールドはしばらくしてからきいた。

「何もすることはない。「ああ勇士たちはついに倒れた」(サムエ)と考えて、身持ちを正しくする以外、きみのすることはなにもない。これは地方の歴史家と系図学者には、いくらか興味のある事実だが、それだけの話だ。こ

の郡の小百姓のあいだには、きみの一門とほとんどおなじぐらいかがやかしい家族が、いくつもある。お休み」
 「だがトリンガム先生、その話をご縁に、あともどりしていっしょにビールを一杯、どうだね。ビュア・ドロップにはとてもいい生があるだ——ロリヴァのほどよくないことはたしかだが……」

「いや、ダービィフィールド、ありがたいが今晚はやめにしよう。きみはもうじゅうぶんはいつているぜ」
 ことばをむすんで牧師は、このふしぎな話をしたことが、思慮分別を欠きはしなかったかと思ひながら、馬を進ませた。

牧師が行ってしまうと、ダービィフィールドは深く考えこんで数歩歩いたが、道ばたの草の土手に腰をおろし、かごを前においた。数分後ひとりの若者の姿が遠くにあられわれ、ダービィフィールドと同じ方向に歩いて来た。若者を見たダービィフィールドは片手を上げた。若者は足をはやめて近よってきた。

「若えの、そのかごをもちな。用たしに行つてもらいたいんだ」

やせた青年は眉をひそめた。「ジョン・ダービィフィールド、このおれに用をいつけ、若えの」と呼ぶおまえはいったい何様なんだ。おまえはおれの名を知って

いる。おれがおまえの名まえを知つてるように」

「知つてるのか、知つてるのか。こりや秘密だ——秘密なんだ。さあ、いうことを聞いて、おれがいいつける伝言を持つて行きな……ところでフレッド、秘密というのはほかでもねえ、おれは貴族のひとりなのだ。おれはそれを、本日現在の午後、自分で見つけ出したのだ」この声明をしながらダービィフィールドはすわった姿勢をくずし、土手のひなぎくの間に長々と横になった。

青年はダービィフィールドの前に立つて、頭のとっぺんから足の先までながめた。

「サー・ジョン・ダーバヴァイル——それがおれなんだ」と、地に横たわった男はいつた。「もし騎士が男爵ならばの話で、ところが、騎士は男爵なんだ。おれにいつては万事歴史に書いてある。おまえ、キングズベリ・サブ・グリーンヒルつてどこを知つてるか」

「うん。グリーンヒルの市へ行つたことがある」

「で、その都会の教会の下に、横になつてゐるのが……」

「都会じゃないよ、そこは。すくなくともおれが行つたころには、片目をぱちくりさせてゐたいな、ちいさな所だった」

「所はどうでもいい。それはおれたちの問題じゃないん

だ。そのその教区の教会の下に、おれの先祖が埋まっている。何百人もが、何トンという重さの大きな鉛の棺の中に、鎖帷子かたびろに宝石を身につけている。サウス・ウェセックス郡サウス・ウェセックスひろしといえども、おれ以上に、堂々として高貴な骸骨がたいくを一門にもっている者はいないのだ」

「へえ？」

「さてそのかごをもって、マールロットへ行き、ピエーア・ドロップのはたご屋に来たら、おれを家へつれて行く馬車をすぐよこせといえ。馬車の底に小びんにつめたラムを入れさせ、おれの勘定にしておくんだ。それがすんだらかごをもっておれの家へ行き、女房に洗濯物をかたづけろ、やりあげなくてもいいんだから、話すことがあるから、おれの帰るのを待ってろ、というんだ」

若者がうたがわしげなように立てるので、ダービーフィールドは手をポケットに入れ、どちらかといえどばわずかしか持っていない一シリンド銀貨を一枚取り出した。

「若えの、駄賃だ」

これでもって若者の考えが変わった。

「はい、サー・ジョン。ありがとう。なにかほかにご用は？ サー・ジョン」

「家の者に、晩飯は羊のフライ——買えればだ。買えな

ければブラック・ポット（血と脂肪でつくったソーセイジ）、それもだめなら、そうだ、チタリングズ（豚、子牛などの小腸を煮たもの）でもいいとい

「はい、サー・ジョン」

若者がかごを取り上げ、歩きだそうすると、村のほうからブラス・バンドの音が聞こえてきた。

「ありやなんだ」とダービーフィールドがいった。「まさかおれのためじゃあるまいな？」

「婦人クラブの遠足ですよ。あんたの娘さんも会員じゃありませんか」

「まったく。もっと大きなことにすっかり考えを取られちゃった。さあ、マールロットへ行って馬車をいいつけな。おれもひょっとすると馬車に乗って、クラブを視察に行くかもしれない」

若者は立ち去り、ダービーフィールドは草とひなぎくの中で夕日を浴びて、横になったままで待った。長い間この道を通る者はひとりもなく、青い丘にかこまれたこの場所であらうにはいる人間の物音といつては、楽隊のかすかな旋律だけだった。

二

マールロットの村は、ブレイクモア、あるいはブラック

ムーアの美しい谷の、北東の起伏の間に位し、ロンドンからわずかに四時間の旅でありながら、まだ大部分が観光客や風景画家の足に踏まれぬ、山にかこまれて隔離された地帯をなしている。

この谷と知り合いになろうとするには、おそらく夏の日照り時は別として、取り巻く丘々の頂上からながめるのがいちばんよい。悪天候の時、案内者なしでその奥にはいりこむと、せまくてまがりくねって泥深い道のせいで、とかくいやな思いをする。

野原がけっして茶色にならず、泉がかわいたことのない、このかくれた肥沃な土地の南の境をなすのが、ハンブルドン・ヒル、ブルバロウ、ネットルコーム・タウト、ドッグベリイ、ハイ・ストイ、バップ・ダウンの突起をふくむ、きわだった白堊の尾根である。海岸からくる旅人は、石灰質の丘原と麦畑を二十マイル北へ歩いたあと、急に、このような崖の縁に立って、それまでに通過した地方とまったく違うものが、地図みたいに下にひるがるのを見て、驚きもするし喜びもする。背後の丘陵はひろびろとして、はてしなく打ち開けた感じを風景にあたえる大きな田畑に太陽が照りつけ、小道は白く、生垣は背が低く枝を折りまげてつくってあり、空気には色がない。ここ、谷間では、世界が、より小さくてより繊

細な尺度で造られているように思われる。野原はまるで小さな牧場に分かれており、この高みから見おろすと、仕切りの生垣は、草の薄い緑の上にひろがる、濃い緑の糸の網のようだ。目の下の空気はうっとしく、その青いことといったら、画家が中景と呼ぶもので、淡青色を帯びるほどであり、かなたの地平線はこの上なく濃いウルトラマリンである。農耕に適する土地はすくなく制限されている。ほんのわずかな例外を除くと、広くて豊かな草と木のつらなりが、小さな丘と谷を、もっと大きな丘と谷の中に包みこんでいる、というのがこのながめだ。ブラックムーアの谷は、このような所である。

この地域には、地形学上の興味にとらぬ、歴史上の興味がある。この谷は昔、「白い牡鹿の森」と呼ばれた。ヘンリー三世治世のころの、ふしぎな伝説によるもので、トマス・ド・ラ・リンドなる者が、王が追いつめて放してやった美しい白い牡鹿を殺し、重い罰金を申しわたされたという。そのころ、またわりあい最近まで、ここは密林だった。今日でも、昔の状態のなごりは、その斜面にいまだに生き残る古い柏の下ばえと、不規則な林の帯、あるいはその牧場の多くに影をおとす幹のうつろな木々に見いだされる。

森は姿を消したが、その木陰の古い習慣のいくつかは

残っている。しかしその多くは、まったく形を変え、あるいは装いを変えて、わずかに生きながらえている。たとえばメーデー（五月一日）のダンスは、さきほどお話した午後の、クラブの大騒ぎ、すなわちこの地で「クラブの遠足」と呼ばれるものの形をとって、まとめられるのだった。

このお祭りに加わる人々は、真の興味に気がつかずにいたが、マローットの若い住人たちにとって、これは興味の深いできごとだった。その特異さは、毎年の記念日に行列をつくって歩き、踊る習慣を維持していることよりも、会員が女に限られる点にあった。男のクラブだと、このような祝賀は、消滅しつつあってもまれではない。しかし女性の生まれつきの内気か、親類の男性の皮肉な態度かが、残っている女のクラブ（ほかにもありとすれば）の栄光と完全さを、はぎ取ってしまった。マローットのクラブだけが生き残って、地方的なセレズ（穀物、農家の女神）の祭礼をつたえていた。それは何百年か、共済クラブとしてではなくとも、一種の願掛けの婦人団体としていまだに続いているのだった。

団体の人々は、全部白いガウンを着ていた。陽気さと五月が同意語だった旧暦の日々（（英国では一七五二年、新暦に切りかえた））からの——長い目で物を見る習慣が、人間の感情を単調な平

均的状态に零落させる前の日々からの、はなばなしい遣風なのである。ふたりずつひと組となって、教区をねり歩くのが、彼女たちの姿をあらわす最初だった。緑色の生垣とつる草のはう家の正面を背景に、太陽が彼女らの姿を照らすと、理想と現実との間に、いささか不和があった。総員が白衣を身につけているのに、同じ白色が二つはなかったからである。あるものは純然たる漂白色に近く、あるものには青味がかった白さがあり、また老齡の人々が着ているもの（おそらく何年も、たたんでおかれたのだろう）は、死屍（しんし）のような色あいをして、ジョージ王朝の旧式さながらだった。

白衣の特性に加えて、どの女も、どの娘も、右手には皮をはいだ柳の枝を、左手には白い花の束を持っていた。枝の皮をむくことと、白い花の選択は、めいめいが自分でやるのだった。

少数の中年配と相当の年の女さえも、行列にまじっていたが、時間と労苦になやまされたその銀色の針金みたいな頭髮と、しわのよった顔は、このような快活な場合にあって、ほとんどグロテスクな、たしかに悲壮な光景を呈した。おそらく、ほんとうに観察すれば、「もういっこうにおもしろくない」という年が近づきつつある、心配と経験に富むひとりの婦人について、話を聞き、そし

て語るべきことが、その若い仲間たちについてよりは、多くあるだろう。しかしここでは年長者をして、その胴着の下で人生が、早く、あたたかく動悸を打っている人々のために、席をゆずらせよう。

事実このむれの大部分は若い娘で、ゆたかな頭髮は日光をあびて、黄金と黒と褐色の、あらゆる色調を反射した。ある者の目は美しく、ある者の鼻は美しく、ある者の口と容姿は美しかったが、そのすべてをそなえた者は、あったとしてもわずかだった。こうしてむざむざと容赦ない人目にさらされるにさいして、唇をととのえる困難、頭をしゃんとたもち、顔だちから自意識を取り除く無力さが明白に見られ、彼女らが多数の目に慣れていない純正な田舎の娘であることを示した。

娘たち全部は、外側から太陽であたためられるとともに、それぞれ魂が日なたぼっこをする私的な、小さい太陽をもっていた。なにかの夢、なにかの愛情、なにかの趣味、すくなくともなにか漠然として遠くにある希望——希望とはすべてかくのごときものだが、むなしく飢えながらも依然生き続けるもの——を持っていた。かくて全部が上機嫌で、多くの者が陽気だった。

行列が「ビューア・ドロップの旅館」にさしかかり、大道から側門をぬけて草地にまがって出ようとすると

き、女のひとりがいった——

「あら、まあまあ、テス・ダービーフィールド。馬車で家さ帰って行くのは、おまえの父さんじゃないか！」

この叫び声に、隊伍の中の若いひとりが、首をめぐらした。他のだれよりも美しくはないにしても——すばらしい美しい娘で、感じやすい芍薬色の唇と、大きくて無邪気な眼が、色艶と姿にゆたかな表情をそえていた。髪に赤いリボンを結んでいたが、白衣の群れの中でこんなに目立つ装飾を誇りうる、唯一の者だった。見まわすとダービーフィールドが、ビューア・ドロップに属する二輪馬車で、道を近づいて来た。御者はガウンの袖を肘の上までまくり上げた、ちぢれ毛の、屈強な娘であり、この旅籠屋の元気のいい召使で、雑用婦の役目にふさわしく、時として馬丁になるのだった。うしろによりかかり、いい気持ちそうに両眼をこじたダービーフィールドは、頭の上で片手をふりまわしながら、ゆっくりした吟唱調で歌っていた——

「おれは——キングズベリに——大きな家族の——地下埋葬所を——持っている——そこでは騎士になった——先祖が——鉛の棺にはいつている！」

クラブのものは、テスと呼ばれた娘をのぞいて、くすくす笑った。父親が一同の笑いものになっているので、